

研究論文 (Articles)

自己愛人格と主観的幸福感との関連に及ぼす
心的表象の影響¹⁾

渡 邊 卓 也

(立命館大学大学院文学研究科)

The Effects of Mental Representations on the Relationship between
Narcissistic Personality and Subjective Well-Being

WATANABE Takuya

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

The purpose of the present study was to investigate subjective well-being as defined by narcissistic personality and to demonstrate the causal model, taking mental representations into consideration as intra-individual factors. Two hundred twenty-two university students, 100 men and 122 women, answered a written questionnaire, and its path analysis revealed that there is an effect that “Anxiety” and “Avoidance” that is mediated on the way to “Subjective Well-Being” from “Hypersensitivity to Others”, “Introversion” and “Vulnerability to Criticism”, which comprise vulnerable narcissism. On the other hand, “Sense of Grandiosity”, a factor of grandiose narcissism, did not show the effect of mediated mental representations of self and others. Furthermore, the results also indicated that “Introversion” and “Vulnerability to Criticism” had significantly positive effects on “Avoidance”, whereas “Hypersensitivity to Others” had a significantly negative effect on it. These results suggested that when vulnerable narcissism is predominant, ambivalent representation affects the process of effects leading to “Subjective Well-Being”.

Key Words : narcissistic personality, mental representations, subjective well-being

キーワード : 自己愛人格, 心的表象, 主観的幸福感

I. 問題と目的

これまで自己愛概念についての研究は、精神分析的な観点により論じられてきた。Freud (1914 : 懸田・吉村 訳, 1969) は、自己愛を

自己全体が性欲動の備給の標的となり、対象愛から撤退した自閉的な状態として理解し、その病理性を中心に理論の構築を行った。その後、Kernberg (1970, 1975) や Kohut (1971 : 水野・笠原 監訳, 1994) らにより人格構造の問題としての独自の理論が展開され、自己愛人格についての理論研究および臨床実践が推進された。また、近年、自己愛人格の諸特徴を誇大な側面および過敏な側面という異なる表現型により捉

1) 本稿は、2007年度立命館大学大学院応用人間科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

える観点が一般的となっている (Gabbard, 1989, 1994; Wink, 1991)。

こうした考究を重ねられた自己愛は、多くの先行研究により、心理社会的な生活上の問題と関連することが指摘されている。その際、特に海外においては、自己中心的な側面や自己顕示的な側面などが強調される自己愛人格の誇大な特性についての議論を中心とし (Raskin, Novacek & Hogan, 1991; Rhodewalt & Morf, 1995; Watson, Grisham, Trotter & Biderman, 1984), また、特に臨床理論においては、評価過敏な側面や自己抑制的な側面などが強調される自己愛人格の過敏な特性が目される傾向があるといえる (Akhtar & Thomson, 1982; Cooper, 1997; 佐野 監訳, 2003; 岡野, 1998)。

ところで、近年、自己愛概念については、それ自体を自己に対する肯定的感覚として捉えるのではなく、自己像を肯定的に維持するための社会的な自己調整の機能として捉え直し、その過程を精査することが自己愛理解の有力な視点とされている。Baumeister, Smart & Boden (1996) や Rhodewalt (2001) らによれば、自己愛による心的機能は、自我脅威状況に伴う自己像の防衛過程を主題とし、自己と社会的環境との相互影響下における自己防衛のための認知的・行動的な方略に至る全体的な過程として理解される。また、Morf & Rhodewalt (1993) が述べているように、こうした自己愛の定式化は、主に対象関係論的な思索から発展し、内的自己表象を肯定的に維持しようと試みる精神力動についての体系的理解を基点とする。よって、自己愛人格と心理社会的な生活上の問題との関連を議論する場合には、不安定で感情的なB群人格障害 (American Psychiatric Association, 2000; 高橋・大野・染矢 訳, 2002) としての判然たる外観だけではなく、個人内の心的表象の力動性を考慮した観点が必要であると考えら

れる。

これまでの先行研究では、自己愛人格の誇大な特性と適応上の望ましい指標との関連が指摘されており (Campbell, 1999; Emmons, 1984; Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro & Rusbult, 2004), また、自己愛人格の過敏な特性と適応上の望ましくない指標との関連が指摘されている (Hibbard, 1992; 上地・宮下, 2005; 中山・中谷, 2006)。このように、自己愛人格と心理的な適応指標との関連を報告する研究は散見されるものの、その内容の多くは、双方の直接的な関連のみについての検討しか行っておらず、介在要因の働きを積極的には検討していない。

具体的な適応指標として、たとえば、先行研究により繰り返し報告される自己愛人格と自尊感情との関連については、人格特性そのものによる効果のみが頻繁に要点とされる (Lapsley & Aalsma, 2006; 小塩, 1998; Rose, 2002)。しかし、自己調整の機能としての自己愛の作用を考える場合には、その標的である個人内の心的表象の様態により、自己についての肯定的感覚が規定される効果が考えうる。また、Asper (1991; 老松 訳, 2001) や Cooper (1997; 佐野 監訳, 2003) らによれば、自己愛人格が顕著な者は、その基体として安定した自己表象の確立に失敗している可能性が考えられることから、そうした特異な心的表象の様態が自己愛人格に特徴的な社会生活上の脆弱性を規定していることが推測される。

よって、自己愛人格と心理的な適応指標との関連について理解を深める上では、こうした自己愛人格に特有の内在要因の影響を取り出す必要があるといえる。また、そうした検討を加えることにより、臨床場面においてクライアントが心理的な適応状態に向かう過程についての有益な示唆が得られるものと考えられる。

そこで、本研究では、自己愛人格が規定する主観的な適応感について検討し、その影響過程

において個人内要因としての心的表象が与える影響を考慮した因果モデルを構成する。また、岡野（1998）が述べているように、適応上の望ましくない指標との関連が指摘されている自己愛人格の過敏な特性については、特に日本において顕著に見られる自己愛の形態であることから、その影響を詳細に吟味する意義があると考ええる。

個人内の心的表象を体系的に検討するための指標として成人愛着スタイルに着目する。Bartholomew & Horowitz（1991）によれば、成人愛着スタイルは、自己および一般他者についての主観的な確信や期待から構成される心的表象（作業モデル）として理解される。また、Brennan, Clark & Shaver（1998）や中尾・加藤（2004）らによれば、自己および一般他者についての心的表象は、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」という2次元により捉えられる。これらの2次元は、それぞれ自己表象および他者表象が否定的であることによる弊害を表している。つまり、自己への価値意識である自己表象が肯定的である場合には、他者との関係に対する不安は低くなり、また、他者からの支援への期待である他者表象が肯定的である場合には、他者に対して親密性を希求し、回避傾向が低くなるという形式により理解される。中尾・加藤（2004）やSrivastava & Beer（2005）らにより各次元と自我に対する否定的評価に関わる変数との関連が実証されており、また、これらの2次元は、Brennan et al.（1998）やFraley & Shaver（2000）らにより個人の感情・行動制御に深く関わることが指摘されることから、成人愛着スタイルは、現下において内在化されている個人内の心的表象の様態とその影響を検討するための適当な変数であると考えられる。

また、本研究では、心理的な適応指標として主観的幸福感に着目する。これまでの先行研究

では、その指標として自尊感情が用いられることが多い。しかし、上述のように、自己愛概念自体が自己を肯定的に維持するための心的機能に関わることから、自己に対する肯定的感覚である自尊感情を独立した適応感の指標として扱うことは、やや不適当であると考えられる。そこで、より広範な意味での主観的な適応感を捉えるために、人生全般についての認知的・感情的評価の主観的状态である主観的幸福感（Diener, Lucas & Oishi, 2002）を適応指標とする。

以上のことを踏まえて、本研究では、先行研究により指摘される自己愛人格と自尊感情との関連については、その影響過程において成人愛着スタイルが媒介変数として働いていると仮定し、これらの複合的な関連の作用により、個人の主観的な適応感が規定されるという影響過程を考える。具体的には、自己愛人格の過敏な特性が優位である場合には、その評価過敏・自己抑制的な諸相から、現下における個人内の心的表象が否定的な様態であることが推測され、それにより自己を肯定的に維持しづらく、結果的に主観的幸福感の低さにつながるという仮説に基づいた因果モデルを構成する。また、自己愛人格の誇大な特性が優位である場合には、その自己中心的・自己顕示的な諸相から、現下における個人内の心的表象が肯定的な様態であることが推測され、それにより自己を肯定的に維持しやすく、結果的に主観的幸福感の高さにつながるという仮説に基づいた因果モデルを構成し、これらを実証することを目的とする。

Ⅱ. 方法

調査対象者

京都府内の大学生に質問紙調査を実施し、222名（男性100名・女性122名）を分析対象とした。対象者の年齢の幅は18歳から33歳までで

あり、平均年齢は19.7歳($SD = 2.22$ 歳)であった。

調査方法

自記式質問紙調査を講義時間の一部を利用して実施し、その場で回収した。

質問紙の構成

(1) ナルシシズム尺度

高橋(1998)が作成したナルシシズム尺度を用いた。過敏で傷つきやすい側面を測定する「周囲を気にする傷つきやすいナルシシズム」14項目、自己耽溺や自己誇大化などの側面を測定する「周囲を気にかけない誇大的なナルシシズム」11項目から構成される。6件法により評定を求めた。

(2) 自尊感情尺度

Rosenbergの尺度を山本・松井・山成(1982)が邦訳した自尊感情尺度を用いた。自身に対する肯定的感情を測定する計10項目から構成される。5件法により評定を求めた。

(3) 成人愛着スタイル尺度

Brennan et al.(1998)のECR(the Experiences in Close Relationships inventory)を中尾・加藤(2004)が修正した一般他者版ECRを用いた。愛着対象から見捨てられるかもしれないという不安を測定する「見捨てられ不安」18項目、愛着対象との親密な関係の回避を測定する「親密性の回避」18項目から構成される。7件法により評定を求めた。

(4) 主観的幸福感尺度

WHOのSUBI(Subjective Well-Being Inventory)を伊藤・相良・池田・川浦(2003)が修正した主観的幸福感尺度を用いた。家族・仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む主観的な心理的健康を測定する計15項目から構成される。4件法により評定を求めた。

Ⅲ. 結果

高橋(1998)のナルシシズム尺度は、自己愛人格の過敏な側面および誇大な側面について言及するGabbardの臨床理論に依拠しており、自己愛人格の2つの特性を測定する適当な尺度であると考えられる。ただし、中山・中谷(2006)が述べているように、この尺度は、それぞれの下位尺度の中に複数の概念が混在していると推測される。これらの概念は、自己愛人格の2つの特性を構成する下位概念であると考えられることから、本研究では、Gabbard(1989, 1994: 館 監訳, 1997)の臨床的指摘の再現性をさらに高めるために、因子数の決定法について再検討し、再度因子構造を確認した上で下位尺度を構成することとした。

ナルシシズム尺度の25項目について因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その際、因子数の過少推定を解消し、新たに複数のマイナー因子を抽出するために、因子数の決定法として堀(2004)による対角SMC(Squared Multiple Correlation)平行分析とMAP(Minimum Average Partial Correlation)の挟み込み法を用い、因子数を漸次的に減少させた。因子負荷量が.45以上の項目を尺度を構成する項目として採用した。その結果、自己愛人格の誇大な特性を構成し、特権意識や誇大な感覚を表す「自己誇大感」(8項目)、自己愛人格の過敏な特性を構成し、周囲の反応への敏感さや注意深さを表す「過剰な他者意識」(3項目)、自己抑制や自己消去を表す「自己愛的内向性」(3項目)、傷つきやすさや恥辱心を表す「批判への脆弱性」(3項目)による4因子解を採用した。Cronbachの α 係数は、「自己誇大感」で.86、「過剰な他者意識」で.88、「自己愛的内向性」で.80、「批判への脆弱性」で.75となり、以降の分析に耐えうるものであると判断された。

Table 1 各変数の記述統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 過剰な他者意識	12.62	3.42	.88	—	.50***	.55***	-.10	.55***	-.08	-.32***	-.26***
2. 自己愛的内向性	9.81	3.53	.80		—	.44***	-.27***	.46***	.19**	-.50***	-.43***
3. 批判への脆弱性	10.91	3.31	.75			—	.04	.67***	.16*	-.35***	-.31***
4. 自己誇大感	21.70	6.62	.86				—	-.03	.01	.47***	.27***
5. 見捨てられ不安	62.48	16.40	.90					—	.18**	-.52***	-.35***
6. 親密性の回避	58.44	15.31	.89						—	-.22**	-.29***
7. 自尊感情	30.37	6.72	.83							—	.50***
8. 主観的幸福感	31.18	5.41	.84								—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

自尊感情尺度、一般他者版ECR、主観的幸福感尺度については、それぞれ先行研究に従い尺度得点を算出した。各尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数、各変数間の相関係数をTable 1に示す。

自己愛人格の過敏な特性を構成する「過剰な他者意識」は、「見捨てられ不安」との間に有意な正の相関 ($r = .55$)、「自尊感情」および「主観的幸福感」との間に有意な負の相関 ($r = -.32$, $r = -.26$)を示した。「自己愛的内向性」は、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」との間に有意な正の相関 ($r = .46$, $r = .19$)、「自尊感情」および「主観的幸福感」との間に有意な負の相関 ($r = -.50$, $r = -.43$)を示した。「批判への脆弱性」は、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」との間に有意な正の相関 ($r = .67$, $r = .16$)、「自尊感情」および「主観的幸福感」との間に有意な負の相関 ($r = -.35$, $r = -.31$)を示した。一方、自己愛人格の誇大な特性を構成する「自己誇大感」は、「自尊感情」および「主観的幸福感」との間に有意な正の相関 ($r = .47$, $r = .27$)を示した。

次に、「主観的幸福感」への影響過程を検討するために、自己愛人格の各変数が愛着スタイルの2次元「見捨てられ不安」および「親密性の回避」、ならびに「自尊感情」に影響を与え、さらに、それらが「主観的幸福感」に影響を及ぼすものとの仮定から、変数間についての因果

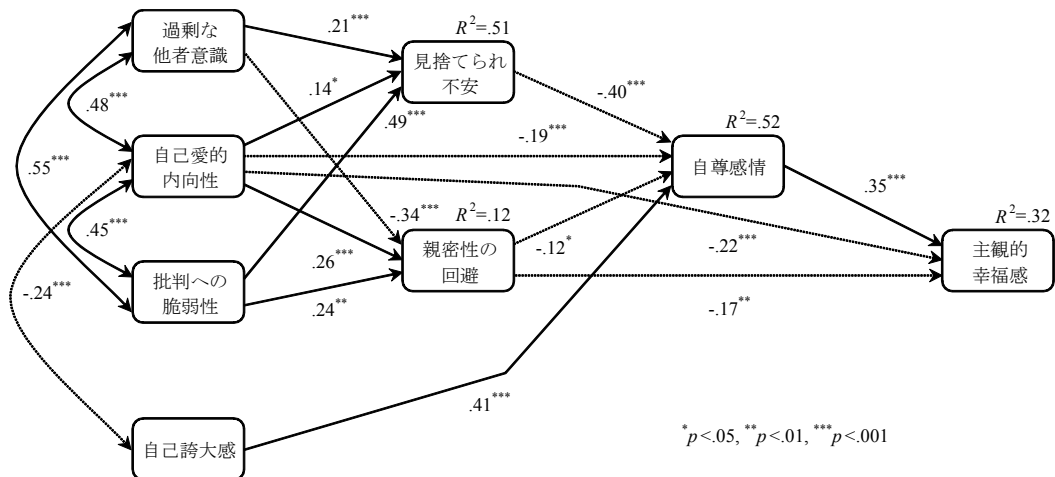


Figure 1 自己愛人格の各変数が主観的幸福感に与える影響過程

モデルを構成してパス解析を行った。モデルの部分的評価の指標としてワルド検定統計量（臨界比1.96）を基準にパスを削除し、また、 χ^2 値の減少量の予測値を表す修正指数（閾値4）を基準にパスを加えてモデルを修正した。最終的にFigure 1の結果が得られた。モデルの適合度は、Figure 1で $\chi^2(11) = 13.14$, GFI = .99, AGFI = .95, CFI = .99, RMSEA = 0.03となり、適合度指標は十分な値が得られた。

自己愛人格の過敏な特性を構成する「過剰な他者意識」および「批判への脆弱性」からは、「主観的幸福感」への直接効果は認められず、愛着スタイルの2次元「見捨てられ不安」および「親密性の回避」、ならびに「自尊感情」を媒介する間接効果が認められた。「自己愛的内向性」からは、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」、ならびに「自尊感情」を媒介する間接効果のみではなく、「主観的幸福感」への直接効果も認められた。一方、自己愛人格の誇大な特性を構成する「自己誇大感」からは、「主観的幸福感」への直接効果は認められず、「自尊感情」を媒介する間接効果が認められた。

「親密性の回避」に影響する要因を比較したところ、各変数が「親密性の回避」に与える影響には大きな違いが見られた。「自己愛的内向性」および「批判への脆弱性」は、「親密性の回避」に正の影響（ $\beta = .26$, $\beta = .24$ ）を及ぼしていた。一方、「過剰な他者意識」は、負の影響（ $\beta = -.34$ ）を及ぼしていた。

IV. 考察

パス解析結果(Figure 1)に示されたように、自己愛人格の過敏な特性を構成する「過剰な他者意識」、「自己愛的内向性」、「批判への脆弱性」からは、「見捨てられ不安」への正のパス係数が、また、「自己愛的内向性」および「批判への脆弱性」からは、「親密性の回避」への正のパス

係数が認められた。これは、自己愛人格の過敏な特性が優位である場合には、自己確信を規定する自己についての心的表象および他者への情緒的受容性を規定する他者についての心的表象が否定的な様態であることを示している。

「主観的幸福感」を規定する「自尊感情」については、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」の影響が見られており、負のパス係数が認められた。これは、関係不安および他者への回避傾向が顕著な場合には、自己価値が低く認識されることを示している。これらのことを統括することにより、自己愛人格の過敏な特性を構成する各変数と「自尊感情」との関連については、愛着次元の影響が媒介していることが明らかになった。つまり、評価過敏・自己抑制的な人格特性は、直接的に自己についての肯定的感覚を規定しているのではなく、現下における個人内の心的表象と関連し合うことにより、自己価値を規定していると推測される。これは、仮説を支持する結果であり、本研究の結果は、自己調整の機能としての自己愛の作用を反映したものとといえる。

愛着スタイルの2次元「見捨てられ不安」および「親密性の回避」は、Brennan et al. (1998) や Fraley & Shaver (2000) らにより個人の思考や行動などを方向づける機能をもつと理解されており、個人内の心的表象が否定的な様態であることにより、特異な自己制御が誘発されることが考えうる。関係不安が顕著な場合には、見捨てられに対する強い警戒心から、個人の思考や行動制御などが対人的文脈に対して敏感となり、他律的な要因により自己価値が揺らぎやすくなることが推測される。よって、こうした他者依存的な自己制御の影響により、自己価値を維持するための確固たる自己基準が希薄化し、主観的な適応感を維持することが困難になると考えられる。また、他者への回避傾向が顕著な場合には、他者への接近可能性を否定的に

捉えることから、周囲との心理的・物理的な接触を回避し、結果的に自律的な要因により自己価値を規定することが推測される。しかし、Figure 1で示されているように、「親密性の回避」については、「自己愛的内向性」および「批判への脆弱性」の影響が見られていることから、必ずしも進取性の高い自己制御を喚起するのではなく、自己抑制や傷つきやすさを動因とする自己防衛のための守勢的な自己制御を喚起すると考えられる。

また、「親密性の回避」に影響する要因については、「過剰な他者意識」からは、負のパス係数が認められた。これは、自己愛人格の過敏な特性を構成する他の変数のそれとは異なり、「過剰な他者意識」が顕著な場合には、他者についての心的表象が肯定的な様態であることを示している。よって、上述したような「自己愛人格の過敏な特性が優位である場合には、自己に対する肯定的感覚を維持することが困難になる」という影響過程の背景には、両価的な心的表象が併存していることが示唆された。つまり、評価過敏・自己抑制的な人格特性は、自己抑制や傷つきやすさを動因とする守勢的な自己制御を喚起していながら、肯定的な他者表象を基盤とする対象希求的な自己制御も喚起しており、「主観的幸福感」の低さにつながる否定的な性向には、このような相反する個人内の心的表象の様態が混在することによる葛藤状態が寄与していると考えられる。

一方、自己愛人格の誇大な特性を構成する「自己誇大感」からは、「主観的幸福感」を規定する「自尊感情」への正のパス係数が認められた。これは、自己愛人格の誇大な特性が優位である場合には、自己価値が高く認識されることを示している。つまり、自己中心的・自己顕示的な人格特性は、直接的に自己についての肯定的感覚を規定していると推測される。この点は予測とは異なっていた。

Leary (2004) によれば、自己価値を高く認識する者は、「他者は自分との関係性を価値のあるものと考えている」という暗黙の想定を根拠とし、周囲からの直接的なフィードバックの影響を受けることなく高い自尊感情を維持し続けるという特徴を示すとされる。自己中心的・自己顕示的な人格特性は、自己完結型の独立自尊な自己制御に大きく寄与していることから、「主観的幸福感」の高さにつながる肯定的な性向には、このような先行研究の結果が示唆する自己本位性が作用していることが推測される。しかし、こうした自己強化的な志向性には、関係様式への無関心さとしての趣旨が含意されており、非常に自己充足的であるために、自己愛人格の誇大な特性が優位である場合には、その程度により対人関係における重篤な危機が起こる可能性が考えられる。

また、「自尊感情」および「主観的幸福感」に影響する要因については、「自己愛的内向性」からは、直接的に負のパス係数が認められた。「自己愛的内向性」は、自己愛人格の過敏な特性を構成する他の変数のそれとは異なり、周囲の反応への敏感さや傷つきやすさなどの周囲からのフィードバックへの応答性ではなく、自己に対する直接的なとらわれを表しており、自己の主体性を否定する自己疎外的な人格特性を測定していると考えられる。よって、「自己愛的内向性」自体が自己についての価値規範に密接に関わる変数であることから、「自尊感情」および「主観的幸福感」への直接効果も認められたと考えられる。

本研究の結果は、自己愛人格が規定する主観的な適応感について検討する場合には、その影響過程において個人内要因としての心的表象が与える影響を考慮することが部分的に有用であることを示している。主観的な適応感への影響過程が明らかになることにより、自己愛人格が顕著な者の内実を積極的に推測することが可

能になり、たとえば、心理社会的な適応上の問題が生じている場合には、その媒介要因である心的表象の再構成を促進することが有効な対応になる可能性が考えられる。よって、本研究の結果は、自己愛人格が顕著な者の主観的幸福感を高める臨床的な訓練の開発を試みる上で役立つものと考えられる。しかし、本研究において検討した要因は、内的対象関係のあり方に関わる個人内の心的表象の様態であり、実際に存在する外的な対人関係の質を反映していない可能性もある。つまり、環境要因としての対人関係が主観的な適応感を規定する調整変数として働いていることも考えられる。福岡・橋本(1995)が述べているように、良好な対人関係の存在は、個人の心理的な支えとなり、日常の社会的活動のよりどころとなると理解されることから、今後は、自己愛人格と心理社会的な適応上の問題との関連をさらに詳細に検討するために、個人内要因と環境要因との相互影響を考慮したモデルの構築が必要であると考えられる。

引用文献

- Akhtar, S., & Thomson, J. A. (1982) Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
- American Psychiatric Association (2000) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 4th ed. text-revision*. Washington DC: American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2002) 「DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル」. 医学書院.
- Asper, K. (1991) *Verlassenheit und Selbstentfremdung*. Olten: Walter Verlag. 老松克博 (訳) (2001) 「自己愛障害の臨床—見捨てられと自己疎外—」. 創元社.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991) Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996) Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.) *Attachment Theory and Close Relationships*. New York: Guilford Press.
- Campbell, W. K. (1999) Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1254-1270.
- Cooper, A. (1997) Further developments in the clinical diagnosis of narcissistic personality disorder. In E. F. Ronningstam (Ed.) *Disorders of Narcissism: Diagnostic, Clinical, and Empirical Implications*. Washington DC: American Psychiatric Press. 佐野信也 (監訳) (2003) 「自己愛の障害—診断的、臨床的、経験的意義—」. 金剛出版.
- Diener, E., Lucas, R. E., & Oishi, S. (2002) Subjective well-being: The science of happiness and life satisfaction. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.) *The Handbook of Positive Psychology*. New York: Oxford University Press.
- Emmons, R. A. (1984) Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (2000) Adult romantic attachment: Theoretical developments, emerging controversies, and unanswered questions. *Review of General Psychology*, 4, 132-154.
- Freud, S. (1914) On narcissism: An introduction. In J. Strachey (Ed. & Trans.) *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud. Vol. 14*. London: Hogarth Press. 懸田克躬・吉村博次 (訳) (1969) ナルシシズム入門. 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) 「フロイト著作集第5巻」. 人文書院.
- 福岡欣治・橋本宰 (1995) 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係. *教育心理学研究*, 43, 185-193.
- Gabbard, G. O. (1989) Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gabbard, G. O. (1994) *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: The DSM-IV Edition*. Washington DC: American Psychiatric Press. 館哲郎 (監訳) (1997) 「精神力動的臨床精神医学—その臨床実践DSM-

- IV版—J. 岩崎学術出版.
- Hibbard, S. (1992) Narcissism, shame, masochism, and object relations: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, 9, 489-508.
- 堀啓造 (2004) 因子分析における因子数決定法—MAPと平行分析 (PA-SMC95) による挟み込み法—. 日本心理学会第68回大会発表論文集, p391.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 74, 276-281.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005) コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, 14, 80-91.
- Kernberg, O. F. (1970) Factors in the psychoanalytic treatment of narcissistic personalities. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 18, 51-85.
- Kernberg, O. F. (1975) *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kohut, H. (1971) *The Analysis of the Self*. New York: International University Press. 水野信義・笠原嘉 (監訳) (1994) 「自己の分析」. みすず書房.
- Lapsley, D. K., & Aalsma, M. C. (2006) An empirical typology of narcissism and mental health in late adolescence. *Journal of Adolescence*, 29, 53-71.
- Leary, M. R. (2004) The sociometer, self-esteem, and the regulation of interpersonal behavior. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.) *Handbook of Self-Regulation: Research, Theory, and Applications*. New York: Guilford Press.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (1993) Narcissism and self-evaluation maintenance: Explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 668-676.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004) “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中山留美子・中谷素之 (2006) 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討. 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 岡野憲一郎 (1998) 「恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで—」. 岩崎学術出版社.
- 小塩真司 (1998) 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. (1991) Narcissistic self-esteem management. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 911-918.
- Rhodewalt, F. (2001) The social mind of the narcissist: Cognitive and motivational aspect of interpersonal self-construction. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & L. Wheeler (Eds.) *The Social Mind: Cognitive and Motivational Aspects of Interpersonal Behavior*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995) Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality inventory: A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, 29, 1-23.
- Rose, P. (2002) The happy and unhappy faces of narcissism. *Personality and Individual Differences*, 33, 379-391.
- Sedikides, C., Rudich, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbul, C. (2004) Are normal narcissists psychologically healthy?: Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 400-416.
- Srivastava, S., & Beer, J. S. (2005) How self-evaluations relate to being liked by others: Integrating sociometer and attachment perspectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 966-977.
- 高橋智子 (1998) 青年のナルシズムに関する研究—ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成—. 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, p147.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. (1984) Narcissism and empathy: Validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 301-305.
- Wink, P. (1991) Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.
- (2010.8.31受稿) (2010.10.20受理)